泉源開発と旅館街の立地傾向にみる近代大規模温泉町の成立過程

—別府温泉を事例として—

THE FORMATION PROCESSES OF THE MODERN SPA TOWN,
WITH THE LOCATION OF HOT-SPRINGS-DEVELOPMENTS AND
THE LOCATION TENDENCY OF THE HOTEL (RYOKAN) TOWN AREA

—The case study of the Beppu spa, Oita—

松田法子*, 大場 修**

Noriko MATSUDA and Osamu OBA

This paper examines the formation process of a spa town in modern, at the case study of the *Beppu* spa, Oita. This spa resort grew up to be the greatest one in modern. In this paper, consider this remarkable change, with the location of hot springs developments and the location tendency of the hotel (*Ryokan*) town area. In the Meiji period, most hot springs located in a line on the “*Yumyaku*”. And the main area of this spa town developed on the “*Yumyaku*”. The hotel (*Ryokan*) town area were formed around the main public baths (*Sotoyu*) through the Meiji period, but at the Taisho period, the new large hotel town was formed at the seaside area. This movement suggests the change of the character of this spa town.

Keywords: *Spa town, Hot spring, Japanese inn (Ryokan), public bath (Sotoyu), Beppu, Modern age*

温泉町, 泉源, 旅館, 共同浴場 (外湯), 別府, 近代

1. 研究の背景と目的

国内には現在約 2,600 箇所の温泉地が存在し、その多さは世界にも類を見ない。旅行や保養、レクリエーションの対象として温泉、温泉地への関心は近年ますます高まっている。

温泉町には、近世以来の歴史を有するものも多い。それらは「温泉」という特異な資源に依拠して成立した町であるという点で、独自の形成過程が予測される。すなわち、温泉（「泉源」¹⁾）は湯脈という地質条件に規定され、泉源と一体的に存在する温泉町の進展には、泉源開発との強い相関性が予測されるのである。この点が、他の町に比する温泉町の特異性である。さらに、近代においては、往来の自由化や交通手段の発展にともなって、温泉地を訪れる人口は増加し、温泉町は大きな変容を遂げたと考えられる。加えて、近代には、掘削技術の向上から、新泉源の開発が可能となった。よって、温泉町については、泉源開発との関係を念頭に起きつつ、特に近代の過程の考察が重要であると考えられる。

しかしながら、現段階で建築史・都市史からの「温泉地」、「温泉町」に関連する研究は、群馬県下の温泉旅館を取り上げた一連の研究²⁾や、近世の山中温泉に関する研究³⁾、近世における温泉町の空間構造についての研究⁴⁾などの数例に留まり、他に、箱根町など、個々の報告⁵⁾はあるものの、いまだ手薄な状況である⁶⁾。

その中で、近世の山中温泉について取り上げた新城・藤田の研究は、主に近世絵図を用い、「総湯」を取り囲む同心円状の集落形態と、総湯を圍繞する「湯本十二軒」が村役を兼ねる点を指摘し、空間・社会的に「温泉」に強く規定される集落構造を明ら

かとしており、注目される。とはいえ、同地の近代の状況や変遷を述べるまでには至っていない。

明治 19 年 (1886) に内務省から刊行された『日本鉱泉誌』⁷⁾は、国内の鉱泉をはじめ網羅的に調査したものである。これによれば、当時、最も入湯客を集めたのは愛媛県の道後温泉で、年間 70 万人強と、群を抜いていた⁸⁾。同書によれば、別府の年間入湯客は 4 万 3 千人程度にすぎない。しかし、約半世紀のちの昭和 10 年 (1935) に刊行された『温泉大鑑』⁹⁾では、別府温泉が年間約 188 万人で、全国の温泉地の最上位に立った。道後はその約半分の 95 万人であった¹⁰⁾。

これより別府温泉は、近代に大きく発展した温泉地、温泉町の代表例とみなしうる¹¹⁾。今日でも、別府温泉の湧出量は国内で最も多く¹²⁾、温泉地の範囲も広い。いわゆる「別府八湯」¹³⁾のうち、現別府市域南東の別府・浜脇の両温泉地を、本稿では便宜上、狭義の「別府温泉」と呼ぶ。近世以来の別府村・浜脇村は、明治 26 年にそれぞれ町制を施行し、同 39 年には合併、「別府町」となった¹⁴⁾。この別府町域が、近代における別府温泉の中心であり、八湯の中でも、最も顕著な発展をみせた。

近代における温泉町の大規模化とは、泉源開発を前提とし、さらなる旅館業の充実や、旅館街の拡大を意味すると考える。別府温泉は、温泉の湧出量が国内最多であるばかりでなく、泉源数、外湯数においても、国内随一である¹⁵⁾。しかも、前掲『温泉大鑑』によれば、昭和 10 年時、同地の旅館数は約 250 軒で最も多く、二番目の熱海 (約 60 軒) を大きく引き離す。

本稿は、2003年度日本建築学会九州支部、及び近畿支部、2003年度日本建築学会大会にて発表の内容に加筆したものである。

* 京都府立大学大学院住環境科学専攻
博士後期課程・生活科学修士

** 京都府立大学 教授・工博

Graduate Student, Graduate School, Kyoto Prefecture Univ., M. Living Science

Prof., of Kyoto Prefecture Univ., Dr. Eng.

よって本稿では、別府温泉を近代における大規模温泉町の代表的事例として取り上げ、「近代温泉町」の成立過程を、泉源開発と旅館街の形成過程を中心に考察したい¹⁶。

2. 近世における別府村、浜脇村の集落構成

近世における同地の姿について概観しておく。

近世の別府村は、西海道の一部になる街道沿いに形成された在町で、元和 8 年 (1622) の『小倉藩人畜改帳』からは、当時民家百軒ほどの集落であったことがわかる¹⁷。ここで、別府村の地割りを詳細に記したほぼ唯一の絵図、延享 5 年 (1748) 『延享別府村絵図』(通称)¹⁸より、道に接する短冊形の地割り¹⁹を抜き出し、明治 44 年 (1911) の市街地実測図『別府町全図』に重ねた(図 1)。これにより、江戸中期の集落は、街道筋と、港から伸びてこれに直交する通り(後の「流川通」)沿いに形成され、T 字型の形態をなしていたことが明らかとなる。また、天保 7 年 (1836) の別府村絵図²⁰(図 2)からは、T 字型の家並みに加え、海浜に新たな家並の形成が確認される(図中、丸で囲んだ部分)。江戸末期のこのような集落構成は、近代初頭までほぼ変化がなかったことが、明治 5 年 (1872) の絵図²¹(図 3)から確認される。

浜脇村は半農半漁の集落で²²、別府村の南に位置する。延享 5 年 (1748) 『延享浜脇村絵図』(通称)²³より、集落は別府村同様、街道沿いの家並を中心としたことがわかる(図 1 参照)。

(図 1) 江戸中期および明治末期 別府・浜脇集落模式図
(『延享別府村絵図』、『延享浜脇村絵図』(延享 5 年)および『別府町全図』(明治 44 年)より作成)

左(図 2) 天保 7 年 (1836) 『別府村絵図』
(部分、別府村における家並みの中心部のみ、書き込み筆者)
右(図 3) 明治 5 年 (1872) 『大蔵省通達ニヨル道路図』
(部分、(図 2) に示す範囲のほぼ同域部のみ、書き込み筆者)

3. 泉源の所有形態と泉源開発

3-1. 近世前期の温泉場の様相と近世後期における泉源所有者

元禄 7 年 (1686) 貝原益軒の『豊国紀行』は、別府村について“民家の宅中に温泉十所有、何れもきよし、(中略)家々に多きゆへ、其館にやどれる客の外に浴する者なし。”と記す。これより、別府村では十軒余りの民家が温泉を有し、湯治宿の機能を備えたと推察される。浜脇村についても、同『豊国紀行』には、“薬師堂の傍らに熱湯あり、その上に乾浴する風呂あり”などと記され、入浴施設の存在がわかる。

文化年間 (1804-1817) には、別府村に「府内屋」をはじめとする 21 人の「湯株」保持者が存在したとされる²⁴。「府内屋」とは日名字家のことで、同家は文永 9 年 (1279)、大伴頼泰より「温泉奉行」に任じられたという由緒を伝える家柄である²⁵。

史料的制約から、近世における温泉場としての同地の様子は、この程度しか明らかではないものの、近世における同地の泉源・湯株所有については、他の温泉地と同様²⁶、限られた人々の特権であったことがわかる。

3-2. 近代の泉源所有者と泉源開発

同地では、「上総堀」²⁷という効率的な掘削手法の導入により、泉源開発が盛んとなった。この、「上総堀」による同地で最初の泉源開発は、明治 22 年 (1889) とされている²⁸。

今回、調査で得た、明治 38 年 (1905) 『別府浜脇両町内温泉調査票』(以下『調査票』)と、三種類の泉源分布図³⁰からなる。『調査票』からは、各泉源の深度や掘削年、所有者などが明らかとなる。

当史料に列記される泉源の掘削年を検討の結果、掘削年が明治 10 年代までのものは少数であったのに対し、明治 20 年代以降のものは非常に多いことがわかった。すなわち、「上総堀」の導入前後では、泉源数が大きく異なることが予想された。よって、ここでは仮に、「上総堀」による最初の泉源開発年とされる明治 22 年を境とし、その前後の泉源数について考察する。

さらに、『調査票』では、泉源が「堀湯」と「穿湯」という二種類に大別されている³¹。この泉源区別も、重要な指標である。この二種類の泉源については、掘削深度をもとに、次のように仮定し得る。すなわち、「堀湯」とは、深度が 0.3~0.5 間などと、特に浅いものが含まれることから、自噴泉、もしくはそれに近いもので、対して、「穿湯」には、深度が 10 間前後のものが多く、中には 20 間以上という深い泉源も含まれるため、これを「上総堀」などの掘削によって得られた泉源とした。

(表 1) 明治 22 年前後における各泉源数 及び外湯数
(明治 38 年『別府浜脇両町内温泉調査票』より作成)

掘削時期	泉源種別	泉源数	うち外湯数
明治 21 年以前	堀湯	5	0
	穿湯	1	0
	その他	0	0
明治 22~38 年	堀湯	6	2
	穿湯	158	7
	その他	2	0
掘削年不明	堀湯	14	10
	穿湯	10	0
	その他	1	1
総計		197	20

(表 1) には、明治 22 年を境とする二期の各泉源数を泉源種別に表記し、各項目に含まれる外湯数を併記した。

3-2-1. 明治 21 年以前の泉源と「堀湯」

『調査票』より、泉源の掘削時期が、明治 21 年以前と判明した泉源は 6 箇所、そのうち 5 箇所が堀湯(残る 1 箇所は「穿湯」)であった。かつ、これら 5 箇所の「堀湯」のうち 3 箇所は、近世に遡る泉源であった。

さらに、『調査票』に記される掘削年代不明の「堀湯」14 箇所に関しても、これに含まれる 10 箇所の「外湯」については³²、少なくとも 7 箇所³³が明治 22 年以前に遡ると推測された。よって、明治 22 年以前の泉源は、外湯を含め、「堀湯」を主体とするものと推察された³⁴。

『調査票』から、掘削時期が明治 22 年以前であると確定した「堀湯」5 箇所の所有者は、以下 5 名である。

国前健治/天保元(1830)年頃、池辺キク/天保年間(1830~1843)頃、阿部三郎/元治元~慶応元(1864~1865)年頃、河合弥三郎/明治 17~18(1884~1885)年、日名子益太郎(二箇所所有のうちの一箇所)/明治 20(1887)年

これら 5 名の堀湯所有者は皆、旧別府町に属するので、旧別府町の納税史料『営業税納税者一覧』³⁵(以下『納税者一覧』)を用いて検討を行った。『納税者一覧』には、営業者の売上げに応じて定められる納税額と等級別に納税者氏名が列記されるうえ、各々の業種も判明する。この明治 38 年度分(納税等級は全十五等級)を参照すれば、国前健治、阿部三郎、河合弥三郎の 3 名が旅館経営者で、かつ、阿部、河合が一等³⁶、国前が二等³⁷と、いずれも最上級の納税等級に属することが判明した。

また、日名子益太郎は、その名が明治 38 年『納税者一覧』には見あたらないものの、前述のように、中世より温泉と深い関わりを持った日名子家の当主であるとともに、明治 28 年以降には旅館を営んでいたことが確かである³⁸。

さらに、今回の調査で得た、明治 44 年『旅館浴客員数表』(別府町発行、以下『員数表』)から、「堀湯」所有者について、明治末期の動向を検討した。同史料には、別府町(明治 39 年の旧別府・浜脇両町合併による)237 軒分の旅館当主名が収録され、当主名は、明治 44 年度中の年間浴客数順に列記されている。

その結果、日名子益太郎、河合弥三郎の営む旅館が、明治 44 年には、年間 7 千人前後の浴客を数える大型旅館であったことが判明した。

さらに、『調査票』に記される掘削年不明の「堀湯」のうち、個人所有である泉源 3 箇所の所有者、計 3 名³⁹について『員数表』より検討すると、うち「甲斐元太郎」が、年間浴客 5 千人以上の大型旅館を営んでいたことが判明した。また、残りの 2 名のうち 1 名は、前掲の日名子益太郎である。

すなわち、掘削年が明治 22 年以前に遡る「堀湯」の所有者 5 名のうち、4 名が旅館業者であったことが『納税者一覧』などから判明し、しかも、『納税者一覧』、『員数表』からは、この 4 名に、年代不明の「堀湯」所有者 1 名を加えた計 5 名が、いずれも当時の有力旅館を営んでいたことが明らかとなった⁴⁰。

3-2-2. 明治 22 年以降の泉源と「穿湯」

明治 22 年以降に開発された泉源は、「堀湯」が 6 箇所、「穿

湯」が 158 箇所、その大半を「穿湯」が占める(表 1 参照)。これより、外湯 7 箇所を除いた 151 箇所の「穿湯」所有者を『調査票』に数え上げると、135 名であった。これに含まれる旅館営業者数を知るために、この 135 名から、会社所有などの共同所有分を除いた、個人所有者 126 名について検討を行った。

126 名のうち、旧別府町に属する 106 名については、前掲の明治 38 年度分『納税者一覧』及び明治 44 年『員数表』を用いて検討した。結果、旅館業者と判明したのは 13 名であった。一方、旧浜脇町に属する 20 名については、『員数表』を用いて検討を行ったところ、旅館業者は 8 名であった。

よって、「穿湯」の個人所有者、かつ旅館業者は 21 名で、個人所有者全体では、1.6 割程である。すなわち、明治 38~44 年頃、「穿湯」の所有者は、旅館業者以外の人々にも広く存在したといえる。さらに、前掲の明治 38 年度分『納税者一覧』からは、中位以下である十等級以降にも「穿湯」の所有者が見いだされ⁴¹、泉源所有の大衆化とでもいえる状況がうかがえた。

ところで、これまでに、熱海や山中などいくつかの温泉町について、近世には泉源や湯権の所有者と、集落有力者が一致することが指摘されている⁴²。別府温泉においては、明治 21 年以前の泉源(≒「堀湯」)の所有者は、主要な旅館の営業者をはじめとする、地域社会の実力者であった。社会的有力層を中心とする泉源の所有形態には、近世的な温泉町構造の継承がみいだせる。しかし、明治 22 年以降には、数多くの泉源(≒「穿湯」)が開発され、その結果、泉源所有者は多様となった。ここにおいて、泉源所有の社会的特権性は急速に薄れたと考えられる。

以上、同地においては、泉源開発によって、温泉町の近世的構造が根本的に変容したといえる。

3-3. 泉源の開発過程と町の進展

(図 4) は、『調査票』をもとに、泉源分布を示したものである。前出の明治 44 年『別府町実測図』に、『取調書類』付属の泉源分布図『別府浜脇両町内温泉深度別図』(以下『泉源分布図』)から、泉源位置をトレースした。泉源は掘削時期別に表記し、その区分は、明治 21 年以前、明治 22~29 年、同 30~34 年、同 35~38 年の四期とした。

まず、明治 21 年以前における泉源分布とは、「堀湯」の分布にほぼ等しいのであり、その分布域は、以下 5 つに分けられた。浜脇地区(A)、海浜地区(B)、旧街道と流川通りの交差地区(C)、田の湯地区(D)、朝見地区(E)である。これらの地域が、別府温泉の遡源的温泉場に他ならない。特に(C)地区は、おそらく『豊国紀行』に記される 10 軒あまりの湯治宿、もしくは文化年間の「湯株」保持者 21 名が軒を連ねた、同地の中心的温泉場に該当するであろう⁴³。

一方、明治 22 年以降の泉源の大半は「穿湯」である。開発の初期といえる明治 22~29 年の泉源は、旧別府町にのみ分布するとともに、その位置は、旧街道と、これに直交する流川通からなる T 字型の地域に限定される(街道以西には 1 箇所のみ確認される)。この T 字型の地域とは、同地の近代初頭の集落域に等しく、かつ近世後期の集落域にほぼ等しい(図 2・3 参照)。

明治 20 年代の同地の集落域は、史料的制約から確定できないが、明治 5 年の家並みから想定するに、やはり T 字型の地域を

(図4) 明治38年(1905) 泉源分布図

(前掲明治38年『別府浜脇町鉱泉二関スル取調書類』付属泉源分布図および前掲明治44年『別府町実測図』より作成)

その主要部としたと推察される。つまり、明治20年代の泉源は、当時の集落域にほぼ限って掘削されたといえ、ここには、宅地と一体的な泉源の存在形態が認められる。

次に、明治30～34年に掘削された泉源は、旧別府町域においては、そのほとんどがT字型地域に集中するが、街道以西や流川通以南などにも開発がみられはじめる。明治35～38年に至ると、街道と(D)地区に挟まれた「不老町」における高密集な泉源開発が目立つようになり、他に、流川通と旧浜脇町の間の地域にも開発が行われている。

前述のように、明治初頭～20年代頃の旧別府町の家並みは、T字型の地域にほぼ限定されたが、明治末期には、『別府町実測図』に示されるとおり、市街地は拡張している(図4参照)。泉源分布域の拡散は、市街地の拡張過程と軌を一にする。

ここで、『泉源分布図』に描き込まれている、「湯脈」に着目したい(図4参照)。「堀湯」のほぼ全てと、「穿湯」の多くは、旧浜脇町と旧別府町を東西に貫く、二筋の「湯脈」沿いに集中するが、とりわけ、泉源は旧別府町側の湯脈沿いに多い。

旧別府町側の湯脈沿いに分布する泉源の深度は、「堀湯」では、掘削深度が明らかな8箇所が全て5間未満で、「穿湯」はいずれも5間以上15間未満である。

対して、浜脇側の湯脈上にある「堀湯」分布域については、まず(A)の浜脇地区に分布する「堀湯」4箇所の深度は、10間未満が2箇所、15間未満が1箇所(ほかに深度不明1箇所)で、「堀湯」でありながら、深度が深い⁴⁴⁾。さらに、同(A)地区における「穿湯」も、10～20間、または20間以上と、一様に深い。なお、(E)地区の泉源は、堀湯による外湯「朝見湯」(深度は1間)1箇所のみである。旧浜脇町側の泉源深度は、旧別府町側に比べて深いことなどから⁴⁵⁾、両湯脈のうち、旧別府町の

湯脈が特に優勢であったことが推測される。

このような湯脈の状況と、地勢的条件から⁴⁶⁾、合併後の別府町の発展は旧別府町域を中心とし、かつ、優勢な湯脈の存在により、「温泉町」として大きく展開したと考えられる。

別府町の、温泉町としての広域的展開の端緒は、明治38年の泉源分布に既に看取される。すなわち、旧別府町側には、点在する遡源的温泉場(B)、(C)、(D)と、その間を埋めるように分布する開発泉源が、ほぼ一列に連なっている。

すなわち、港から街道へ垂直に延びる「流川通」は、近代の同地における第一の繁華街であった。さらに、明治35年以降に泉源開発が集中した地域で、外湯「不老泉」を擁する「不老町」には、明治36～37年以降、にわかに旅館街が形成されたことが判明した(後述)。つまり、別府港～「流川通」～「不老町」～「田の湯」を結ぶ経路は、交通の要所、同地第一の繁華街、さらには、旅館街をとまなう新旧の温泉場を相互に繋ぐ東西軸であり、ここに、「温泉町」別府の幹線が形成されたといえる。

近世の同地は、別府村と浜脇村を南北に結ぶ街道を軸とし、集落もこれに沿って形成されていた(図2参照)。しかし、明治後期には、この新たな東西軸が「温泉町」別府の主軸をなした。この近代の軸線は、まさに湯脈の上に形成されたのである。

4. 旅館街の形成過程と外湯、泉源の様相

明治末～昭和初期における同地の旅館の趨勢を知るものとして、明治41年(1908)『豊後温泉史』⁴⁷⁾、大正9年(1920)『別府市旅館能力調査票』⁴⁸⁾(以下『能力調査票』)、昭和26年(1951)『別府市旅館業の実態』⁴⁹⁾(昭和12年の旅館データを掲載)を得た。

当時の旅館がほぼ網羅的に掲載される、これら3史料を用い、近代の同地における旅館の立地傾向について、考察を行った。同時に、「外湯」や泉源と、旅館立地との関わりを探った。

(図5) 旅館数及び泉源立地(町別/明治末・大正・昭和初期)

(前掲明治41年『豊後温泉史』、大正9年『別府市旅館能力調査票』、昭和26年『別府市旅館業の実態』より作成)

地域的な傾向を知るため、別府町（大正 13 年以降は別府市）域を立地特性別に 6 つの地域に区分した。すなわち、〈浜脇〉（業師町他 5 町を一体化して述べる⁵⁰）、〈南部〉（「浜町」など計 5 町）、〈中部〉（「本町」、「中町」など計 5 町）、〈北部〉（「海門寺」、「老松」など計 4 町）、〈海浜〉（「北浜」「港町」など計 4 町）、〈山の手〉（「不老町」など計 4 町）である⁵¹。（図 5）には、地区区分と、明治末（明治 41 年）、大正（大正 9 年）、昭和初期（昭和 12 年）三期の、各町の旅館軒数を示す。

4-1. 明治末期における旅館街と外湯の相互関係

明治 41 年（1908）『豊後温泉史』には、126 軒の旅館とその所在地が記載される。これにより、明治末期の旅館は大きく 3 地区に集中したことがわかった。〈浜脇〉（32 軒）、〈海浜〉の「北浜」（16 軒）と「港町」（37 軒）、さらに〈山の手〉の「不老町」（18 軒）である。

一町の旅館数としては、「港町」が特に多く、それは、当時唯一の交通の要所、別府港の眼前の地域であったからと考えられる。しかし、特に〈浜脇〉や「不老町」における旅館の集中については、交通便の面からは説明され得ない。

ここで、外湯と旅館の立地関係について考察した。

明治 42 年『別府温泉誌』⁵²をはじめとする当時の案内書より、明治末期の外湯の位置を白丸でプロットした（図 5 参照）。さらに、それらの案内書を元に、対外的に著名な外湯であったとみられる、「東温泉」、「西温泉」、「竹瓦温泉」など、計 6 つの外湯を抽出した（図中、少し大きい白丸にて表記）。これら 6 つの著名外湯の所在地を検討すると、その立地は、「東温泉」・「西温泉」の所在地(a)、「竹瓦温泉」・「霊潮泉」・「楠湯」の所在地(b)、「不老泉」の所在地(c)の 3 つに分類がなされた。

これら、著名外湯の所在地 (a) ~ (c) と、旅館の集中地域とを比較すれば、(a)=〈浜脇〉、(b)=「北浜」・「港町」、(c)=「不老町」という関係がみいだせ、両者の立地傾向はよく一致する。

しかも、(a) ~ (c) に挙げた 6 つの外湯は、全て明治 30 年代に新調され、規模も増大したもので、別府温泉のなかでも、特に集客のため力が投じられた外湯であったことがわかった⁵³。

「竹瓦温泉」（明治 35 年改築）について、明治 41 年『豊後温泉誌』には、“この付近は、数年前までは実に寂寥の場所であったが、今は近隣に宏壮美観の宿ができ、浴者の往来も多い”と記される⁵⁴。しかも、大正 9 年『能力調査票』からは、同地域の旅館のほとんどが、明治 35 年以降に創業したことが判明する⁵⁵。

また、明治 35 年に計 7 棟の建築からなる一大温泉施設に改築された⁵⁶「不老泉」を擁する「不老町」には、明治期に計 13 軒の旅館が創業したことがわかったが（大正 9 年『能力調査票』）、これら 13 軒の創業年は、明治 28 年に創業の 1 軒を除き、全て明治 36 年以降であった。つまり「不老町」には、外湯の改築後に多くの旅館が創業し、「旅館街」が形成されたといえる。

外湯の充実に伴うように、外湯の周囲に旅館街が形成されたこれらの事例からは、外湯と旅館とが一体的に温泉町街区を形成する過程の一端がうかがえる。

同地における明治期の「旅館街」とは、主要な外湯の周辺に形成されたものと推察され、そこには、外湯と旅館との密接な関係を反映した立地傾向が読みとれた。

4-2. 大正～昭和初期における海浜旅館街の形成

大正 9 年『別府市旅館能力調査票』を用い、大正期の旅館立地について検討した。結果、最も注目されたのは、〈海浜〉地区「北浜」における旅館数の飛躍的増加で、次には、〈中部〉の「梅園町」と「北町」における新たな旅館街の形成であった⁵⁷。

「北浜」における旅館数の増加は、臨海道路「海岸通」の完成（大正元年）によるものと推察される。これを受け、海浜の眺望を売り物にする旅館街が新たに形成された。同地域の旅館が、ほぼ一様に木造三階、四階建と多層であることから、眺望の確保を第一とした旅館の特性がうかがえる⁵⁸（図 6）。

（図 6）昭和 3 年の海浜旅館街

（左から「児玉屋別荘」「愛媛屋」「松屋」，別府観光産業経営研究会『別府近代建築史』1993.12.1, pp.81 より転載）

また、「北浜」は、港からの交通便の良さでも優れていた。同様、〈中部〉の「梅園町」と「北町」に、新たに旅館街が形成されたことも、鉄道駅の開通（明治 44 年）により、両町の交通便の向上したことが大きな要因と考えられる。

以上、大正期の旅館立地には、眺望や交通の利便性など、観光の要素を伴う土地が強く望まれるようになったことがみいだせる。明治末期には、旅館、浴客と、外湯との強い相互関係に、「近世型温泉町」の構造が依然として看取されたが、大正期の新たな旅館街形成により、温泉町全体の構造は大きく変化した。ここには、「近代温泉町」の成立を如実にみだし得る。

続いて、昭和初期における旅館立地について、昭和 12 年時の旅館データ（前掲昭和 26 年（1951）『別府市旅館業の実態』所収）を参照し、検討を行ったところ、「北浜」と、鉄道駅周辺地域の旅館数にはほとんど変化がみられなかった。これは、大正期において旅館の創業が同所に集中したことで、さらなる旅館創業の余地が残されていなかったことによると想像される。

これらの地区にかわり、昭和初期に旅館の創業地として台頭したのは、「浜町」・「海門寺」・「老松」など、〈南部〉と〈北部〉の臨海地域であったことがわかった。いずれも、大正末～昭和初頭にかけ、ようやく竣工したばかりの埋立造成地区である⁵⁹。

昭和初期における旅館の立地傾向には、大正期以来の、臨海地域への指向性が、より一層、明確に認められた。

4-3. 大正～昭和初期における旅館と、泉源、外湯の相互関係

旅館の泉源所有について、明治 38 年『調査票』からは、泉源を所有する旅館業者が計 25 名確認された⁶⁰（3-2-2 参照）。明治 38 年における別府町域の旅館軒数は、140 軒弱（明治 41 年に 139 軒。『別府町史』, 1914（大正 3）より）と推測されるため、明治 38 年には、旅館の自家泉源所有率は必ずしも高くなかった。かつそれは、明治末期の、外湯を中心とした旅館の立地傾向とも符合する。

しかし、同地の泉源数は、明治末～大正期初頭に急増した。すなわち、明治 38 年に 197 箇所であった泉源は（『調査票』より）、明治 43 年には 461 箇所となり、大正元年には 1 千箇所を超えていた⁶¹。この急激な泉源数の増加とともに注目されるのが、旅館

数の増加である。すなわち、明治 41 年に 139 軒であった旅館数は、同 44 年には 237 軒に増加している（『員数表』より）。

急激な泉源開発の進展は、泉源所有のさらなる一般化とともに、新たに旅館業に参入した人々を含む、旅館営業者の泉源所有率の向上をあらわすと推測される。例えば、明治 44 年に創業し、大正 9 年までには、同地最大の宿泊施設に成長した「亀の井旅館」では、敷地内に 11 箇所もの泉源を所有していた⁶²。

なお、大正期には、同地の旅館の大半が「内湯」を有したことも明らかとなった。前掲、大正 9 年『能力調査票』からは、これに掲載される旧別府町⁶³の旅館 171 軒のうち、その 8 割以上にあたる 142 軒に、「内湯」の所有が確認される。このように高い内湯の所有率は、自家泉源の各旅館における普及に少なからず関係するであろう。

旅館の自家泉源や内湯所有率の増加は、「外湯」とは無関係な旅館の立地傾向を助長したと考えられる。旅館立地の自由度が高まったことで、眺望や交通の利便性など、観光的要素を伴う土地への旅館の進出が後押しされたといえる。それは特に、臨海地域における旅館街の進展に示されている。

一方、当該期における外湯の性格には、二分化が見いだせた。

明治期以来の著名外湯は、別府市により、相次いで改築が行われ、改築後の外湯は、これまでよりも、より大規模で、目を惹く建築となった。建築を整え、規模も拡張することで、著名外湯のさらなる集客がはかられたものと考えられる。「霊潮泉」の改築（大正 6 年）に続き、「不老泉」が改築され（同 10 年）、さらに、浜脇の「東温泉」と「西温泉」は、統合のうえ「浜脇高等温泉・浜脇温泉」と名称を変更し、昭和 3 年に改築された（図 7）。「竹瓦温泉」も、昭和 12 年に改築された（図 8）。以上、4 つの外湯の設計は、全て別府市の建築技師によって行われた⁶⁴。

（図 7）「浜脇高等温泉・浜脇温泉」（西側立面,1:850,別府観光産業経営研究会『別府近代建築史 資料編』,1993.12.1,pp.63 より転載）

（図 8）「竹瓦温泉」（南側（正面）立面,1:850,前掲『別府近代建築史 資料編』,pp.93 より転載）

この時期、「泉都」を標榜し⁶⁵、昭和 12 年に開催された「国際温泉観光博覧会」に代表される数々の観光事業⁶⁶を推進した別府市にとって、やはり外湯とは、温泉町の象徴的役割を担う重要な「観光資源」として、ここに位置付けられたといい得る。

しかし、「春日温泉」（大正 14 年）、「梅園温泉」（昭和 5 年）をはじめとする、当該期に新設された外湯の多くは、観光向きではなく、地元住民の利用に供するための外湯であったことが明らかとなった⁶⁷。大正～昭和初期に創建された外湯 15 箇所を、

（図 5）中に黒丸で示している⁶⁸。これらは、旅館街とは無関係に立地し、かつ、（図 1）に示す明治末期の家並みの外側、すなわち、大正期以降にあらたに形成された市街地に創設されている

ことがわかる。

つまり、大正期以降、同地の外湯は、より観光機能を強めた少数の外湯と、その他多くの日常生活施設とに分化したといえる。

なお、旅館の泉源所有や、内湯化の進捗と、生活施設としての多くの外湯の新設とは、ともに泉源開発の進展を背景としている。かつ、それは、全国屈指の温泉湧出量を誇る同地の豊富な温泉資源を前提とする点は、重要である。

5. 結び

本稿は、別府温泉を事例とし、泉源開発や、旅館街形成の動向から、「近代温泉町」の成立過程を明らかにした。

泉源開発の過程には、「温泉町」別府町の、空間構造の再編をみた。すなわち、特に泉源開発が集中した旧別府町域においては、港や繁華街、温泉場を連結する「温泉町」の新たな軸線が、「湯脈」に沿って創出されたことを確認した。

また、泉源所有者の変遷からは、明治 30 年代以降の泉源数の急増と、泉源所有の一般化によって、温泉の特権的所有という近世的構造が大きく変容したことを指摘した。

しかも、泉源開発の進展は、明治末期までの「外湯」を中心に旅館街が形成される、温泉町のいわば近世的構造をも、変化させたことを明らかにした。すなわち、大正期以降には、眺望や交通の利便性など、観光的要素に優れた場所が旅館の立地として強く指向され、その結果、特に臨海地域には大規模な旅館街が形成された。また、このように、旅館街が外湯とは無関係に立地する動向は、湯治に利用される外湯の本来的意義の弱体化、旅館の内湯化に相まって進行したと推察される。

しかし、大正期以降、外湯がその存在意義を失った訳ではなく、少数の著名外湯は、観光資源として選別され、一方では、多くの外湯が、住民の生活施設として新設された。

ここで、別府温泉が、近代に全国屈指の温泉町に発展を遂げた背景について暫定的に言及すれば、その要因として第一に挙げられるのは、同地の豊富な温泉資源を背景とする活発な泉源開発であろう。その結果、旅館立地の自由度は高まり、旅館街と、温泉町それ自体の拡大が可能となった。臨海地区に形成された旅館街に代表されるように、時代の要請に対応した旅館街は、同地に多数の浴客を喚ぶ、大きな原動力となったと考えられる。また、鉄道に加え、港湾を有する同地の交通インフラも、多数の浴客を迎え得た、重要な要因として見逃せない。

なお、別府温泉について取りあげた本事例研究からは、温泉町の近世から近代への変容を指摘し得る視点として、大きく次の三点を抽出し得た。すなわち、一.旅館（旅館業者）の増加と旅館街の拡大、二.泉源開発の隆盛と泉源所有者の増加、三.温泉町における外湯の意義とその変容、である。以上の視点は、近代の他の温泉町を考察するうえでも、応用が可能と考える。

謝辞：本稿は、2003 年度竹中育英会助成金交付研究の一環としてまとめたものです。関係の各方々には、ここに記して深甚の謝意を申し上げます。

また、拙稿にあたっては、多くの方々にご協力、ご援助を賜りました。特に『別府近代建築史』（別府観光産業経営研究会、1993.12.1）を編纂された藤田洋三氏、また、別府市誌編集事務局主査永野康洋氏、ホテルニューツルタ代表取締役社長鶴田浩一郎氏、今日新聞記者小野弘氏、鉄輪温泉「みゆき屋」のご当主をはじめとする皆様に、ここに記して謝意を申し上げます。

¹ 本稿では、「温泉」の取得口（「湯口」）を以下、「泉源」とよぶ。

² 村田敬一「四万温泉積善館の建築」『日本建築学会計画系論文報告集』No.531, pp.259, 2000.5 / 「群馬県の本造3階建て温泉旅館建築」同論文集 No.538, pp.243, 2000.12

³ 新城景子、藤田勝也「近世における温泉町の空間構造—加州江沼群山中温泉を事例として—」『日本建築学会計画系論文報告集』No.569, pp.245, 2003.7

⁴ 安藤正順、渡辺貴介、村田尚生「江戸期の温泉地の空間構造に関する研究」『都市計画』第204号 pp.259, 1996.12.28

⁵ 『神奈川県の近代和風建築』神奈川県教育委員会, 2000.3 / 『静岡県の近代和風建築』静岡県教育委員会, 2002.3 等

⁶ 建築史・都市史以外の分野からの研究については、山村順次の一連の研究集『日本の温泉地』日本温泉協会発行, 1998 や、温泉地、温泉町の空間構造を、地形や水系、宗教施設等の要素を用いて分析し、分類を行った下村彰男の一連の研究「近世・明治期における温泉地の空間構造に関する一考察」『造園雑誌』研究発表論文集7, pp.223, 1989 / 「明治期温泉地の空間構造と地形・水系との関係性に関する考察」同論文集9, pp.21, 1991 / 「近代における温泉地空間構造の変遷に関する考察」同論文集7, pp.241, 1993) が代表的であるが、どちらも温泉地個々の詳細な考察まではなされていない。

⁷ 内務省衛生局編・発行, 1886 (明治19) .2

⁸ 現在も著名な温泉地としては、熱海が3万人強、箱根が5万人強。

⁹ 日本温泉協会発行, 1935 (昭和10) .3.5

¹⁰ 年間入湯客数で別府に続く温泉地は、佐賀県の武雄温泉が2番目で約130万人、熊本県の山鹿温泉が3番目で120万人前後、道後が95万人で4番目、佐賀県の嬉野温泉が40万人強で5番目と、道後を除いては上位を北九州の温泉地が占めていた。以下は、軒並み20万人前後。

¹¹ 熱海の発展は、昭和9年の丹那トンネル開通以降である。

¹² 2002年度別府市作成資料によると、別府温泉の湧出量は約13万7千(kl/日)で、2番目は由布院の約6万3千(kl/日)、3番目は伊東の4万8千(kl/日)である。

¹³ 別府・浜脇・亀川・鉄輪・明礬・柴石・堀田・観海寺

¹⁴ 明治26年に町制を施行するまでの別府村・浜脇村を、以下旧別府村、旧浜脇村と呼ぶ。同39年の合併までの行政区を、以下旧別府町、旧浜脇町と呼ぶ。合併後の別府町は、大正13年に別府市となる。

¹⁵ 現在、別府市における共同浴場は99箇所（別府市観光経済部温泉課作成資料）、泉源は2845箇所である（『保健所報』大分県中央保健所, 2002.6）。

¹⁶ 近代の別府について扱った既往研究としては、温泉町郊外の別荘地開発について取りあげた、高砂淳「野口地区の開発の経緯—別府市における市街地と別荘地の形成に関する研究—その1」『日本建築学会梗概集』F-2分冊, 1996, pp.47、及び、高橋正義「戦後復興期の別府市における一連の「観光都市建設計画」に関する研究」『都市計画学会学術研究論文集』第36号, pp.241, 2001がある。

¹⁷ 『別府市誌』別府市役所, 1980.3.8, pp.400

¹⁸ 別府市立図書館蔵

¹⁹ 同図における土地の種類別に、宅地をあらわす項目はなく、実際の屋敷地を確認することはできない（これら短冊形敷地の土地種類別は、「本田」もしくは「本畑」である）。しかしながら、道に接するこれら短冊形敷地の相当数は屋敷地にあたることが、後年の史料、天保7年『別府村絵図』（図2）や、安政4年（1857）の見取り図（荒金家『諸留留』, 前出『別府市誌』1980年版, pp.401, 所収）などとの比較から推察される。

²⁰ 阿部巖編『別府歴史地図総覧』別府教育資料館発行, 1986

²¹ 大蔵省の道路取調通達により作成。『別府市誌』（1980年版）所収

²² 前出『別府市誌』（1980年版）, pp.151

²³ 別府市立図書館蔵

²⁴ 府内屋・中津屋（勘）・天満屋・伊予屋・三佐屋・延岡屋・田中屋・杵築屋・竹田屋（喜）・角屋（源）・上角屋・豊前屋・植田屋（源）・植田屋（次）・国東屋・布屋・小倉屋・伊勢屋・竹田屋（九）・中津屋（清）・角屋（六）（『別府市誌』別府市役所, 1928.4.1, pp.11より）

²⁵ 『別府温泉誌』佐藤蔵太郎, 1909 (明治42).7.15, pp.9

²⁶ 熱海、山中、伊香保などでは、「湯戸」、「湯本」などと呼ばれる20人前後の湯株保持者によって、温泉が管理・利用されていた（前出『日本の温泉地』）。

²⁷ 上総で成立した井戸掘削技術。前掲『温泉大鑑』によれば、明治期より、ひろく温泉掘削に利用されるようになったという。

²⁸ 明治12年、萬屋儀助との説もある（『別府市誌』（1980年版）pp.479）。

²⁹ 「鉱泉監督官」松田繁による報告書。大分県知事宛。「今日新聞」記者小野氏より提供。原本は鉄輪温泉「みゆき屋」所蔵。

³⁰ 掘削深度別、温度別分布図各一、及び湯脈分布図一。

³¹ ほかに、「井戸」2箇所と、「引湯」（外湯「新湯」）1箇所。

³² 床下温泉、野田湯（畦ナシ湯）、田ノ湯、滝ノ湯、朝見ノ湯、西温泉、東温泉、長湯庵、乙原温泉、九日田ノ湯。長湯庵は所在が判明しなかった。

³³ 床下温泉、野田湯、田ノ湯、滝ノ湯、朝見ノ湯、西温泉、東温泉。前出『別府市誌』（1980年版）pp.176, 阿部巖『別府温泉湯治場大辞典』創始社出版, 1987.12.5 より開湯年代を検討。

³⁴ 『調査票』には、年代不明の「穿湯」が10箇所記されるが、年代が明らかな「穿湯」159箇所中に、明治20年以前の泉源は1箇所に過ぎないことから、これら年代不明の「穿湯」10箇所に明治20年以前の泉源が含まれる可能性は低いと判断し得る。

³⁵ 今回の調査で、旧別府町の『納税者一覧』について、明治26～大正12年のもののうち、19年分の現存が判明した（別府市議会事務局保管）。

³⁶ 一等納税者は7名（木賃6、材木1）。

³⁷ 二等納税者は4名（木賃3、汽船問屋1）。

³⁸ 大正9年『別府旅館能力調査票』より。事実上、明治10年頃には既に旅館業を営んでいたともいう。

³⁹ 年代不明の「堀湯」14箇所のうち、10箇所は外湯（表1参照）で、残る4箇所のうち、3箇所が個人の所有である（甲斐、日名子以外に「岩岩五郎」）。岩岩は「員数表」には見いだせない。残る1箇所は、「塩屋別荘」の所有（旧浜脇町。屋号より旅館と推察されるものの、確定せず）。

⁴⁰ さらに、明治38年掘削の「堀湯」所有者、藤澤森太郎が、明治44年までには、汽船問屋から旅館業に転業していることも判明した。

⁴¹ その家業は、洋燈、写真、煙草、履物など多様であった。

⁴² 熱海：『熱海市誌』熱海市役所, 1968.1.8, pp.432, 山中：前出新城・藤田論文、伊香保：前出『日本の温泉地』pp.33

⁴³ 『豊国紀行』より、邸内に温泉を有したと明らかな庄屋の高倉家と、中世に温泉奉行に任じられ、また、21名の湯株保持者の1人である「府内屋」日名子家は、いずれも街道沿いに位置し（前掲『別府市誌』、『別府今昔』より）、その所在地は、（図5）の（C）地区付近に該当する。

⁴⁴ 湧出量の低下などから再掘を行ったため、「堀湯」でありながら深度が深くなったとも考えられる。浜脇東西温泉はこれに該当する。

⁴⁵ また、旧浜脇町の泉源は大正期以降、湯量が低下したという（前出『別府市誌』（1980年版）pp.212）。

⁴⁶ 旧別府町は、別府湾を囲む扇状地の平坦部に位置するが、旧浜脇町は扇状地の南端部にあたる狭小な地域に位置する。

⁴⁷ 加藤十次郎, 1908 (明治41) .4 (『別府市誌』1980年版より引用)

⁴⁸ 岡野貞司編, 1920 (大正9) .7

⁴⁹ 別府市役所産業課, 1951.12

⁵⁰ 浜脇については、各町の範囲が小さいため、薬師町、東町、魚町、入江町、新町の各町を一体化し、（浜脇）地区とした。

⁵¹ 本稿で規定したこの地区区分内に、地域的には含まれても、近代を通じて旅館が立地しない町は、地区の町数として計上していない。

⁵² 佐藤蔵太郎著 1909 (明治42) .7.15

⁵³ 前出『別府温泉史誌』1909 (明治42) .4, 『別府市誌』（1980年版）

⁵⁴ 加藤十次郎, 1908 (明治41年) .4 (『別府温泉湯治場大辞典』pp.195)

⁵⁵ 明治期創業の旅館は21軒、うち明治35年以降の創業が15軒。

⁵⁶ 前出『別府温泉史誌』1909 (明治42)

⁵⁷ 明治41年、「北浜」の旅館は16軒だったが、大正9年には49軒に増加した。また、明治41年には全く旅館がなかった「梅園町」と「北町」には、大正9年、「梅園町」に20軒、「北町」に8軒の旅館を数え得る。

⁵⁸ 同地における旅館建築の詳細については、別稿にて扱う予定である。

⁵⁹ 「浜町」が含まれる、浜脇から別府港の南側地先は、三期にわたって工事が行われ、大正10～昭和3年中に竣工。「海門寺」、「老松」が含まれる別府港北側の造成地区、「鶴水園」は大正末期に竣工。

⁶⁰ 「堀湯」所有旅館業者5名、同「穿湯」21名。「堀湯」と「穿湯」両方の所有者が一名あるので、泉源を所有する旅館業者は計25名。

⁶¹ 別府市誌編集室作成資料（2002）より。

⁶² 亀の井旅館の所有不動産一覧（昭和3）より（亀の井ホテル所蔵）。

⁶³ 旧浜脇町域に属する旅館については、現在内湯のデータを欠く。

⁶⁴ 浜脇東西温泉は、池田三比古（別府市営繕技師、渡辺仁事務所在籍の経歴がある）が設計（池田は、浜脇温泉の建設とほぼ同時期に行われた、吉田鉄郎による別府市公会堂建設にも関与）。竹瓦、霊潮泉、不老泉は村上利作（別府市営繕技師）の手による（以上『別府近代建築史』資料編、別府観光産業研究会編, pp.55/93）。

⁶⁵ 大正、昭和初期頃より、公的な文書においても使用された。戦後まもなくの同地の都市計画「別府国際泉都計画」にも、この呼称が使用される。

⁶⁶ 昭和3年には「中外産業博覧会」開催、競馬場の竣工、同5年には鶴見園（歌劇場などを敷設する遊園地）、別府ゴルフ場、ケーブルカー竣工など、昭和初期の同地には観光事業が相次いだ（前出『別府市誌』, 1980年版）。

⁶⁷ 「梅園温泉」は、梅園町の住民4名が資金を出し合って建設し、入浴料は無料として住民らに開放していた。また、「春日温泉」は、町内住民の浴用のため、行合町が創設した（前出『別府温泉湯治場大事典』）。

⁶⁸ 『別府温泉市街図』1924（大正13年）, 和田成美堂発行, 『別府温泉案内図』1929（昭和4年）, 大阪寝々堂旅行案内内部発行, 『別府市街全図』1931～35（昭和6～10年頃）, 発行者不明 他、鳥瞰絵図等を用いて確認した。

（2004年1月9日原稿受理、2004年5月7日採用決定）